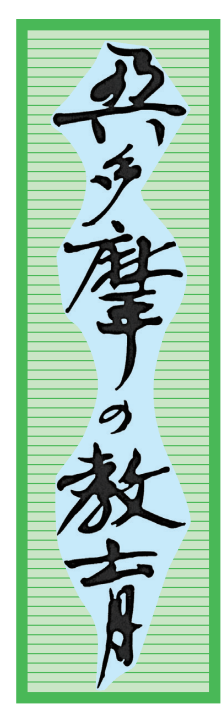


GIGAスクール構想に基づき、令和2年度中に、奥多摩町の全児童・生徒へタブレット型端末を配付しました。奥多摩町では、「町にしながら、距離も時間も超えられる、最先端の教育を」という願いのもと、平成27年度より奥多摩中学校から一人1台タブレット型端末の配備を進めてきました。令和2年3月から約3か月間に及んだ新型コロナウイルス感染症に伴う突然の休校中は、全国に先駆けるかたちで、オンライン双方向の学習を開始することができました。手探りではありながらも実践を積み重ね、より効果的な活用方法について、中学校から小学校へと手だての普及が図られています。

高度な情報化社会を生きていく子どもたちだからこそ、授業においてもタブレット型端末を鉛筆やノートといった文房具のように使いこなすことが求められます。子どもたちの可能性を更に伸ばせるように、学校教育は大きく変革していきます。



第225号
発行
奥多摩町教育委員会

GIGAスクール構想 これまでの教育実践×ICT



授業支援ソフトにより、先生や友達ともすぐにつながることができます



一人1台端末で可能になること

一人ひとりの考えをリアルタイムで共有
双方向の意見交換

令和3年8月1日現在	
児童数	148名
生徒数	67名
教職員数	48名



テレビ電話やWeb会議システムを活用して、対面型の授業が可能です

目的に応じた情報を主体的に
収集・整理・分析

写真・音声・動画等を用いた
多様な資料・作品の制作

オンライン授業
参観の取組も
始まっています



子どもたちがタブレット型端末を適切・安全に使いこなすことができるよう ※1ネットリテラシーや情報モラルを育成することも重要です。そのためには、保護者の皆様のご協力が必要不可欠となります。各学校の「タブレット型端末使用のルール」等をご確認いただき、お子様と一緒に家での約束を決めてください。
※1ネットリテラシー：インターネットを適切に使いこなす能力

GIGAスクール構想とは
一人1台端末と、校内通信ネットワークを一体的に整備することで、これまでの教育実践と最先端のICTのベストミックスを図り、**子どもたち一人ひとりに合った学びにより、子どもたちの力を最大限に引き出す**教育環境を実現することです。

奥多摩中学校

特色ある教育活動

① 本校の教育の基盤である

「全員支援教育」

全ての生徒に対し、必要に応じて必要な支援を施していく、これが「全員支援教育」の理念であり、本校の教育の基盤です。授業における個別的な支援にとどまらず、2週間に一度実施する校内委員会では、生徒一人ひとりの生活上の課題についても対応策を検討し、関係諸機関とも連携しながら全生徒の支援にあたっています。

② 主体的・協働的に学ぶ

様々な教育活動において、少人数で協力し合いながら目標達成を目指す学びの場を設け、教員は※2ファシリテーターとして、生徒の主体的かつ協働的な学びをサポートします。この「主体的・協働的な学び」を通して、生徒の自己管理能力・人間関係形成能力・課題解決力の実践的

活用を促していきます。
※2ファシリテーター…生徒に発言等を促し導くサポート役

③ 21世紀を

生き抜く力を育てる

(ICT機器やマインドマップ及びプロジェクトアドベンチャーの手法の活用)

ICT機器については、生徒に一人一台持たせるタブレット型端末(iPad)の活用によって、個別最適な学びを促していきます。
また、思考ツールとしてのマインドマップの手法や社会性を育むプロジェクトアドベンチャーなどの手法を活用して学びを深めていきます。

目標：郷土を大切にし、21世紀をたくましく生きる生徒の育成

地域を支える人材

社会の中で自分のよさを生かせる人材

主体的

協働的

ESD

持続可能な社会の形成者として生きていくために

キャリア教育

社会の中で役割を果たしながら自分らしく生きていくために

【社会と関わり、自己の可能性を発揮しながら、よりよく生きていく力】

- ☆働く意義の理解
- ☆役割の理解
- ☆多様な生き方の理解
- ☆将来設計力
- ☆意思決定力
- ☆行動力と改善力

【実践フィールド】

- ・協働の時間
- ・各種行事
- ・部活動 等

【能力開発フィールド】

- ・各教科の授業
- ・道徳科の授業
- ・学級活動 等

【課題解決に生かせる学力】

- ◇ 課題の本質を見抜く力
- ◇ 見通しをもつ力
- ◇ 多面的・多角的な検討力
- ◇ 考えを再構築する力
- ◇ 実行力・学習調整力・改善力

- ICTの活用
- Mind mapの手法
- PAの手法

【協働を支える

人間関係形成能力・豊かな心】

- ◇ 感謝と思いやりの心
- ◇ 他者を理解し協働する力
- ◇ コミュニケーション・スキル
- ◇ フォロワーシップ・リーダーシップ
- ◇ 公正・公平な態度

- ICTの活用
- Mind mapの手法
- PAの手法

【主体性の基盤となる

自己管理能力】

- ◇ 自己肯定感
- ◇ 主体的な行動力
- ◇ 自律的な責任遂行力
- ◇ ストレス・マネジメント
- ◇ 健康・安全な実践力

全員支援教育

古里小学校の特色のある教育活動

古里小学校は、奥多摩町教育委員会の研究指定校の2年目を迎え、令和4年2月9日（水）に研究発表を行います。ここでは、古里小の研究実践について報告します。校内研究については、HPにも掲載しています。

教育目標 「いのちを大切にして 共に輝き 生きていこう」
かしこく なかよく たくましく

研究主題 自分の考えをもち、表現できる児童の育成

副主題 低学年分科会：整理の仕方を工夫して
中学年分科会：整理の仕方・表現したくなる場を工夫して
高学年分科会：整理の仕方・可視化を工夫して

今年度は「低・中・高」分科会を編成し、それぞれの子どもの発達段階に即して研究教科と副主題を設定しました。一昨年度と昨年度に積み上げてきた成果を基に、各教科の特性と児童の実態を踏まえて研究主題の達成を目指します。

<1学期の授業実践・活動のようす>

*2学年 体育 5月26日（水）教諭 小林 「マットパーク in 古里」

児童の思いを生かし多様なつぶやきを引き出すために、教師はファシリテーターとしての役割を意識し授業を展開しました。子どもたちは「次は〇〇をしてみたい」と、場づくりや運動に主体的に取り組んでいました。

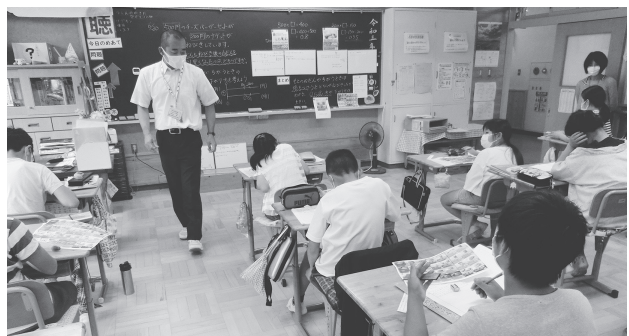


*3学年 国語 6月9日（水）主任教諭 大塚 「まいごのかぎ」

物語中に登場する「鍵」に対して自分なりの名前をつけるという活動を設定し、子どもたちがより関心を寄せられるようにしました。また短冊や「気持ちマーク」を活用し、友達との考えと比べながら主人公の気持ちの変容を考えました。

*5学年 算数 6月30日（水）主任教諭 中村 「小数の倍」

問題文から何を求めるのか、考えを整理しながら数直線に表したり、ホワイトボードを用いて考えを分類したりしました。また、自力解決したことを交流する場を設定し、友達との話し合いを通して考えを深められるようにしました。



氷川小学校の特色ある教育活動

氷川小学校の教育目標は、「自ら進んで学ぶ子」「仲良くやさしい子」「健康で明るい子」の3つです。昨年度から本格実施されている学習指導要領に沿いながら、氷川小学校がもつ特色を生かしてより効果的な教育活動を展開しています。子どもも大人も生き生きと成長し、笑顔あふれる学校になるよう工夫して取り組んでいる活動を紹介します。

自ら進んで学ぶ子を育てる取組

子どもは同じ年齢であっても、課題はそれぞれ違っています。氷川小学校では、1クラス10名程度の少人数を生かして、児童一人ひとりに応じた、丁寧な指導を心掛けています。担任だけではなく、他の先生や学習支援員など多くの大人が目を見て、長所や課題を多面的に捉えられるよう、こまめに情報交換を行なっています。

また、一人1台のタブレット型端末を、授業や家庭学習で活用することを計画的に進めています。知識だけではなく、表現力や思考力を向上させる学習を展開しています。

自分の成長を実感できるからこそ、向上心が高まり、進んで学習に取り組んでいこうとする気持ちが生まれます。



仲良くやさしい子を育てる取組

氷川小学校では、縦割り班での活動を日々の生活や行事に取り入れることで、異年齢の関わりを大切にしています。低学年の子は、上級生の姿を見て多くのことを学びます。高学年の子は、自分自身も下級生に誇れる姿を見せようと、責任感をもって様々な活動に取り組むようになります。全校児童数は少ないですが、密度の濃い集団活動を重ねているので、子ども同士関わる機会は多く、思いやりの心が育っています。

また縦割り班活動を通して、リーダーシップや積極性といった資質も育てています。



健康で明るい子を育てる取組

氷川小学校では、外遊びを奨励しています。鬼ごっこやドッジボールといった遊びを、各学年や縦割り班で毎日のように行なっています。

体育の時間に行うスポーツは、コロナ禍においても安心して取り組むことができ、かつ少ない人数でも熱中して行うことができる、テニピン(簡単なラケットのできるテニス型ゲーム)やアルティメット(フライングディスクを使ったサッカーのようなゲーム)などのニュースポーツを積極的に導入しています。子どもたちは体を動かすことを心から楽しんでおり、それに伴って体力もぐんぐん向上しています。6月に行われたテストでは、満足のいく成績を収めることができました。



奥多摩町学校給食センター 給食ブログの紹介 奥多摩町の給食を覗いてみませんか？

奥多摩町では、古里小学校・氷川小学校・奥多摩中学校の給食を、学校給食センターで調理し、配送しています。

調理は手作りを基本として、カレーやコロッケ、ハンバーグなどを一から調理し、和食の日には、かつお節や昆布を使用し、だし汁をとっています。

学校給食では、旬の食材や行事食、地場産物などを献立に取り入れ、それらの大切さを子どもたちに伝えるようにしています。

奥多摩味噌を使った奥多摩汁の献立



七夕の節句の献立



この度、学校給食の様子をお伝えするためのブログを開設いたしました。給食の写真を掲載したり、献立についてのポイントなどを紹介しています。ご家庭で給食についての話題を共有していただいたり、学校給食に興味をもっていただけたらと思います。左側のQRコードから、ブログに移動することができますので是非ご覧ください。

※QRコードが読み取れない方は、URLからアクセスしてください。

給食センター栄養士 名取望



給食ブログQRコード

<https://www.rlco.jp/kyushoku/>

教育相談室より

【寄り添うこと】

相談員 石上和伸

相談室の近くにある氷川小橋の下の河原には、いつも川遊びを楽しむ人々の姿があります。コロナ禍の中、町も自粛を呼び掛け、来客は減りました。それでもお母さんやお父さんと子どもたちといった、少人数で河原におりた家族が楽しく駆け回る姿を時折見かけます。

コロナ疲れという言葉がありますが、先行きの見通しに日々、否応なく変わらざるを得ない生活のストレスが、知らず知らずのうちにたまります。特に人とのコミュニケーションの在り方は、変わるところが多かったと思います。

原稿を書いている時、東京都では4度目の緊急事態宣言が発令されました。不要な外出は避けるべきですが、健康を保つための散歩などは例外とされています。この「健康」には心の健康も含まれていると思います。

特に、豊かな自然に恵まれた奥多摩では、鳥・虫・植物といった他の命のかかわりに、心癒すことができます。

ある環境学者は、生命への驚きと畏敬が生きる力を育てると言いました。そしてその力は環境を整えるだけではなく、大人が子どもと一緒に体験しながら、自らがまず驚嘆し面白がり探求することによって育っていくとしていきます。

導く、支える、見守る：子どもとのかかわり方はさまざまですが、河原で楽しむ家族の姿に、まず私たち大人が寄り添い、共に歩むことの大切さを改めて思いました。

また子どもたちがこれからの人生を自分の力で歩み、前に進んでいくために、環境に恵まれた郷土の良さを生かしたいとも思います。

皆様とともに、私たち相談室も子どもたちの育ちを支えていくことができれば幸いです。



郷土奥多摩(文化財)

その21

小丹波熊野神社の舞台・川井八雲神社の舞台と石崖棧敷

文化財保護審議会委員 福島 喜彦

今回の文化財は、小丹波熊野神社と川井八雲神社の舞台です。共に、昭和50年に東京都指定有形民俗文化財に指定されました。両神社は、それぞれ小丹波地区、川井地区の高台に位置して絶妙の場所に鎮座しています。

幕末から昭和の初年にかけて、西多摩・南多摩地域の主として神社の境内には、演劇などを楽しむために種々の形態の農村舞台が多く建てられました。それらのなかで小丹波熊野神社と川井八雲神社の舞台は、一般的に



熊野神社舞台 (神楽殿)



熊野神社
境内から見た舞台 (神楽殿)



八雲神社
境内から見た舞台 (神楽殿)



八雲神社
棧敷上に本殿

は、神楽殿と呼んでいます。演劇の舞台としての機能と神社の楼門に似た性格とを兼ね備える独特な舞台で建築の構成上非常に特色があります。また、傾斜地を利用して境内全体が階段状に舞台棧敷であるかのような配置で、都内では他にあまり例がなく貴重なものです。

小丹波熊野神社は、古里駅北口より2分の山裾の傾斜地にあり、参道の上に鳥居が建ち、舞台下の参道石段を上がると境内広場があり、さらに石段を登って本殿に至ります。舞台は明治13年に建てられ、その後何度か改修が行われましたが、直近では平成21年に修理工事が行われました。舞台の建造方式は、萱葺楼門建、入母屋造で間口12.7m、奥行5.5m、懸造り。

階上の舞台面は、地表から79cm高、舞台は境内への参道石段をくぐるように建てられ、神社の門としての役割も担っています。そして、石垣に接した懸造りとなっていて参道の下から見ると2階建てに、また境内から見ると平屋の舞台に見えます。1階は、楽屋と物置で楽屋から舞台に通じる階段もあります。境内広場は舞台2階(神楽殿)とほぼ同じ高さで、広場奥には棧敷状に石段が積まれその上に本殿があり、本殿と舞台が対峙しています。現在は、毎年4月29日に「小丹波熊野神社祭典の集い」が開催され、集いのトリに「こ組」のお囃子が奉納されています。

川井八雲神社は、川井駅より南西に徒歩9分の山裾の傾斜地

にある鎮守社で舞台は、安政年間(1854~1859)創建と言われています。その後、昭和59年に解体し復元されました。舞台は間口10.9m、奥行5.4m、懸造り。屋根寄棟造りで茅葺き屋根は胴板葺きに修理されました。階上の舞台面は、地表から76cm高、前面の雨戸および中央2本の柱は、取り外し可能、背面中央は、窓戸付き窓、他は、板塀であり、階下の中央は神社の参道、社殿に向かって右脇間は、楽屋、左脇間は物置になっています。舞台に面した社殿前の石垣は、6段に構築され、棧敷として利用されて理想的な観覧席となっています。

現在は、4月の祭礼で獅子舞が奉納されています。
【参考文献】 東京都の文化財